



「松本さんのこと」～自作の道德資料～

校長 田中 俊光

今から20年前のことです。当時、担任をもっていた私は、「自分が書いた文章で道德の授業をやってみたい」と考え、私が書いた資料「松本さんのこと」を使って授業を行いました。テーマは「家族愛」です。ファイルを整理していたら出てきたので、今回の校長だよりで紹介します。20年前ですので「山口県立中央病院」「看護婦」になっていますが、原文のまま紹介します。

「松本さんのこと」

平成12年6月 田中 俊光

ここは、山口県立中央病院の4階、外科病棟の428号室です。今、12時30分。松本さんは、午後1時からの手術に備えて、移動用のベッドに移ったところです。外科の手術を受ける場合は、前日から下剤を飲んでお腹の中を空っぽにして、手術時刻の1時間前にトイレをすませ、40分前には手術着に着替え、移動用のベッドに移って看護婦さんを待つことになります。この頃には、松本さんの奥さん、息子さんとそのお嫁さん、そしてお孫さんも病室におられました。少しして看護婦さんが来られ、腕に注射を一本打たれました。この注射は、精神安定剤で、ほとんどの患者は、これを打たれると手術室に入る前に寝てしまうそうです。脳の神経を鈍くする薬なので、ちょうどビールを飲んだときのように、だんだん意識がぼんやりとしてきて、なんとなく気持ちよくなってきます。松本さんは、移動用ベッドに横になったまま1歳くらいのお孫さんをお腹の上に抱えて、上げたり下げたりしてあやしています。そして、

「今、タバコを吸ったら、うまかろうな」

と一言。すぐさま奥さんに、

「何をバカなことを…。こんなにみんなに心配をかけて」

としかられて、抱いていたお孫さんを取り上げられてしまいました。タバコを吸うと手術後にのどにタンがつまってかなり苦しむので、外科病棟は禁煙なのです。手術に行くときは誰もがこんな調子で、ここで声をかけるのが同じ病室にいる残りの三人の役割なのです。

「いよいよですね。頑張ってください。松本さんはもう5回目の手術だから慣れたもんでしょう」

手術のときには、患者は麻酔をかけられて、ずっと寝ているだけです。頑張るのは、手術をするお医者さんなのですが、みんなこんなふうに声をかけます。その後、松本さんはしばらくしゃべり続けていましたが、だんだん舌がもつれてきて、そのうち静かに眠りにつきました。ちょうどその頃、看護婦さんか来られて、松本さんは手術室へと運ばれて行きました。

松本さんとの最初の出会いは、2週間前でした。この部屋の一人が次の日に退院するという、その人のところに50歳過ぎの小柄でパンチパーマの男の人が、お見舞いに来られ、こう言っておられました。

「先月まで一緒に入院していて、わしが先に退院したと喜んでいたら、今度は右足の血管がつまったらしい。左足の血管から人工血管を右足まで通す手術になりそうだ。わしは、今度で5回目の手術じゃ。あんたが退院するんじやったら、このベッドにわしが入るようになるかもしれんわ」

このときは、単に「入院慣れた人だなあ」と思う程度でした。3日後、松本さんは、そのベッドに入ってこられました。

「3日前に言っておられた通り、本当にそのベッドでしたわね」

これが、僕が松本さんにかけて最初の言葉です。

松本さんは話好きで、自分から話をし始めることも多かったのですが、なんとなく話しかけやすい雰囲気をもった人で、僕も、そして同室の他の二人も、自然と話しかけるようになりました。

「わしは、ダンプの運転手で、去年の10月、山口の小鯖^{おさば}からジャリを積んで、防府の西浦の埋め立て地に運ぶ途中、ピーナッツを食べおったら、腹の具合が変になって、こりやまずい、と思っていたら、あんのじょう、だんだん痛みが強くなって、こりや、腸閉そくじゃ。病院にダンプで乗り付けるわけにもいかんから、いったん会社に帰って、会社の者に乗用車で連れてきてもらった。それが前回の入院じゃ」

何回もお腹を切ると、その度に傷口に腸がくっついて、腸がつまってしまうという「腸閉そく」になりやすいのです。早い話が、便秘のすごくひどいのです。この腸閉そくになると、最初は軽い痛みなのですが、痛んで、休んで、痛んで、休んでをくり返しながら、だんだん痛みがひどくなるのです。

「赤ちゃんを産むときの陣痛^{じんつう}と一緒に。そして、腸閉そくになったら、救急の受付に行かんと、すぐみてもらえん。外科の受付に行ったら、すごく待たされるんじやから」

このことも松本さんに教わりました。このときは「子どもを産んだこともないのに陣痛^{じんつう}なんてよくわかるな」くらいしか考えていませんでしたが、まさか僕がこの腸閉そくに3回もなろうとは、夢にも思いませんでした。3月の退院前に1回め、4月に2回め、そして8月に3回め。なるほど、陣痛^{じんつう}とはこういう感じだろうな、と思うような痛みでした。

松本さんと僕と、もう二人。そのうちの一人が退院して、次に入ってこられたのが、大橋さんです。お医者さんと大橋さんの会話を聞いていると、僕と同じ病氣らしいことがわかりました。病院では、同じ病氣にかかっている人どうしは、よく話をするのです。先に手術をした人が、どんな感じだったか、手術後どうだったかを話し始めます。ついこの前の自分の体験なので、話す方は自然と熱が入ります。そして、聞く方も必死です。何しろ明日の自分の命がかかっているのですから。

ところが、この大橋さんとはあまり話をしませんでした。あまり好きではなかったのです。正直言って、きらいでした。理由は二つあります。一つめは、大橋さんは、病室に患者四人だけにいるときには、あの医者はどうだ、この医者はどうだと批判めいたことを言ったり、突然の入院^かに対して不平、不満をこぼしたりするのですが、お医者さんや看護婦さんが病室に来られると、蚊の鳴くような弱々しい声で「腹が痛い」と訴えるのです。強気でいくのならば、誰の前でも、最後までそれを通してほしい。逆にそうでないのならば、陰口はたたかないでほしい。これが僕の気持ちでした。二つめは、大橋さんは、息子さんのことを非常にいばるのです。息子さんは東大を卒業して、東京で仕事をしておられるらしいのですが、何度この話を聞かされたことか。これだけならば、ただの親バカとして聞き流せるのですが、反対に、娘さんとそのおむこさんはボロクソなのです。

「娘とそのむこは、本当にわしのことを心配しちやらん。医者とぐるになって病院に入れてしまいおった」

娘さんは実の子なのでまだがまんできるのですが、こんな風に言われると、おむこさんがかわいそうでなりませんでした。

ある時、松本さんと話していると、その話の中に大橋さんも加わってこられました。最初は、僕と松本さん、大橋さんと松本さんというように話していたのですが、いつの間にか、僕と大橋さんで話すようになりました。松本さんがいなければ、信じられないことです。いまだに不思議でしょうがありません。松本さんがこの部屋に来られてから、会話がはずむようになり、部屋全体が明るく楽しい雰囲気に包まれるようになりました。

松本さんがこの病室にいただけで、雰囲気が明るくなる。松本さんには、何ともいえない不思議な魅力があります。その魅力の源はいったい何なのか。僕はそれが知りたい。